

差別を許さない闘いを 誓いあい 第48回企業連定期総会

部落解放和歌山県企業連合会第48回定期総会を9月19日、和歌山市民会館でひらき、企業連会員約900人が参加した。



企業の経営安定のため、尽力しようとあいさつする瀧口秀光理事長

企業連を代表して、瀧口秀光・理事長より「部落の中小零細企業においては、仕入価格の高騰や価格競争による売上減少や事業者数の減少、事業主の高齢化にともなう後継者不足、さらには消費税率の引き上げによる価格転嫁への困難な状況など深刻な経営課題が山積している。会員の経営安

定と生活の向上、地域の雇用確保にむけ、あらゆる取り組みを推進していかねければならない」とあいさつがあった。つづいて、藤本哲史・執行委員長から「推進法が制定されて2年を迎え、行政への交渉のなかで具体的なとりくみを要求してきたが実現できていない。差別を

憎み、差別を許さない闘いが部落解放運動であること、を肝に銘じ、会員の皆さんにおいても支部活動を中心にさらなる運動をすすめてほしい」と今後の運動の方向が示された。その後、中央本部の坂本三郎・執行副委員長、行政を代表して和歌山県より稲葉信・商工労働政策局長、和歌山市より松村光一郎・産業部長から祝辞をいただいた。また、特別報告として来年4月の統一地方選挙必勝にむけ、組織内候補を代表して藤本まり子・特別執行委員より決意表明がなされた。

支店
三好正紀・支店長
紀陽銀行本店
上土谷武・人事相談室長
企業連顧問
仁木靖夫・税理士、橋本義彦・税理士、藪田雅秀・税理士、向川茂弘・税理士、坂本昌一・税理士、新井悠喜雄・行政書士、小倉正義・融資審査委員

支店
飯田圭一・支店長兼国民生活事業統轄、朝広純一・中小企業事業統轄、森下勝弘・農林水産事業統轄
日本政策金融公庫田辺支店
須藤健文・支店長
和歌山県信用保証協会
藤本陽司・理事長
和歌山商工会議所
野田浩史・企業支援部次長
和歌山県商工会連合会
野田孝雄、参与
商工組合中央金庫和歌山

支店
飯田圭一・支店長兼国民生活事業統轄、朝広純一・中小企業事業統轄、森下勝弘・農林水産事業統轄
日本政策金融公庫田辺支店

支店
飯田圭一・支店長兼国民生活事業統轄、朝広純一・中小企業事業統轄、森下勝弘・農林水産事業統轄
日本政策金融公庫田辺支店

支店
飯田圭一・支店長兼国民生活事業統轄、朝広純一・中小企業事業統轄、森下勝弘・農林水産事業統轄
日本政策金融公庫田辺支店

支店
飯田圭一・支店長兼国民生活事業統轄、朝広純一・中小企業事業統轄、森下勝弘・農林水産事業統轄
日本政策金融公庫田辺支店

第4回大逆事件サミット in新宮

第4回大逆事件サミットを10月6日、新宮市福祉センターでひらかれ、全国各地より約250人が参加し、遠くはオーストラリアから駆けつけた参加者もいた。

記念講演では「石川啄木と大逆事件」と題して国際啄木学会の伊藤和則さんから啄木の日記や当時の資料から分かった啄木の思いや人生などを語った。新宮から、大石誠之助が訴え、実践していた「自由と平等・人権と博愛・非戦

北山誠一を偲んで
連載の最終稿となる。1974年10月8日、県連再建大会を成功させ、組織と運動の強化にむけ、北山誠一は中心的な役割を担っていた。また、同じ年に「父」となり、翌年第二子が生まれた。さて、北山は組織の強化とともに運動の広がりをも求めている。1976年に部落解放和歌山県共闘会議の結成を果たし、以前からすすめてきた「研究集会」など地域でのとりくみを基礎に、湯浅町共闘会議の結成に尽力した。これまで県内で10地域で結成されていた地域共闘で、現在も活動できているのは湯浅町共闘だけである。また、1980年には県実行委員会の前身である「法」強化改正要求県実行委員会の結成を果たした。また、1984年には県連書記長とともに中央執行委員にも就任し、全国的な運動にも奔走することになった。とくに、中央生活対策部長として、自身の仕事でもあった町社会福祉協議会事務局長や湯浅での福祉を基本とした「まちづくり」運動の経験やベテランに全国的に地域福祉運動の重要性を訴え、運動をおこしてきた。さらに1989年、社会福祉協議会を退職して県連の専従書記長に就任し、地域、県内外の運動の最先頭に立ち、激務の日々がつづいていた。しかし、そのあいだも、さまざまな課題を提起し、その実現にむけて最先頭で奮闘してきたことはいうまでもない。また、1990年にタイ・バンコクで開催された国際会議に国連NGO・IMADRのメンバーとして出席し、国際的な人権課題にたいして意見交換をおこなってきた。そんな奮闘の日々のなか悲報は突然やってきた。1999年2月24日、統一地方選挙前にして組織内候補の選挙準備に追われて夜の11時過ぎに帰宅し、意志半ばにして帰らぬ人となった。享年61歳の若さであった。北山誠一・元書記長の人生は、部落解放運動への情熱の日々であった。野球好きの多感な少年期、子ども会活動をつうじて差別への憤りと課題を感じ、地域での運動にまい進した青年期、さらに30代半ばにして県内の運動の混乱に、その正常化・再建に奔走した日々、そして県内の運動の強化と広がり求め、やがて中央本部役員として全国各地を飛び回った、まさに戦いの連続であった。その足跡は、多くの人びとに共感を与えた。また、家庭を大事にする人であったが、無類の酒好きであり、スポーツをはじめさまざまな遊びにも興じた。頑固であり、また懐の深さもあって人間関係も非常に幅広い人であった。今回の連載は、北山誠一という人となりを簡単にまとめたものには過ぎないが、彼への言葉にならない心情もあわせて、その霊前に捧げるものである。連載は、以上で終了する。